

## 第八章 終戦前後

東条内閣のあとを受けて、昭和十九年七月に成立した小磯内閣の蔵相には石渡荘太郎が留任したが、昭和二十年に入ってそのあとを北支那開発総裁の津島寿一が襲った。

空襲による惨害の善後策などを講ずる上で予算増額の必要を感じた津島蔵相は、急拠二十億円の追加予算を作るとともに、就任後の初人事で池田勇人を本省の主税局長に起用した。そして、津島蔵相の秘書官には、大平の一年先輩の黒金泰美（のち内閣官房長官）が任命されたが、翌三月十九日には、大平も秘書官事務取扱を命ぜられた。

「私は生まれ落ちてからまさか秘書官稼業をやるうなどは夢にも思ったことがなかった。大学を出て役人になってからも、大臣とか秘書官とかいう人種とは凡そ縁もゆかりもないものと心得ていた」。

戦局が最悪の状態に近づいてきたことを悩んだ小磯内閣は、蔣介石の重慶政府と和平を結ぶ案をつくり、三月二十一日の最高戦争指導会議に提出したが、重光葵外相はこれに強く反対し、その結果は内閣の総辞職につながった。津島の蔵相在任期間はわずか四十五日であって、その事蹟は、さきの追加予算案の提出と議決ぐらいで、特に記録さるべきものはなかったが、大平は最初の秘書官稼業で、我儘な殿様然とした津島蔵相の面倒をみるために、人に知られぬ苦勞をする一方、物事を大所高所から見られる機会を与えられた。大平の知人の一人は、「大平さんは、日本が敗けることは何より残念だが、今の日本のように軍部独走でもし勝った

としたら恐い世の中になるだろう。そしてそのような日本は早い時期に倒れる日がくるのではないかと当時としては思い切ったことを話していた」と記している。

おそらく大平は、日本の将来の動向を、津島蔵相を通じて十分に把握していたのであろう。

小磯内閣のあとには、鈴木貫太郎を首班とする終戦内閣が四月七日にでき、大平は、津島の退官とともに、同十八日、主計局へ戻った。

昭和二十年五月二十五日夜半の帝都大空襲の日には、たまたま津島蔵相に仕えた大蔵省幹部が津島邸の庭に集まって酒を酌み交わしていたが、B29爆撃機の編隊は、次から次へと東京上空に侵入し、焼夷弾の雨を降らせ、津島邸にも火がついた。

「私は津島夫人と女中さんを連れて逃げ出した。ところが途中で、突然夫人が仏壇に観音様を忘れたので、お迎えに来てほしい」といわれるのであった。私はすぐとって返し、火災の中で観音様を救い出したものの、夫人たちの一行とはぐれてしまった。ずっしりと重い金属の像であった。それを抱きかかえながら四谷駅へ向う途中、一、二メートル離れたところに、焼夷弾を包む大きい鉄の輪が落ちた。直撃を免れたものの、身の危険を感じた私は、駅長室に観音様を安置して単身逃げ、市ヶ谷駅近くのトンネルで一夜を明かした。翌朝、観音様を迎えた私は、やっと下二番町の詰所で、津島一家と無事再会することができた。津島邸のあった場所にも行ってみたが、もちろん津島邸は全焼して跡形もなかった。

それから私は、牛込の自宅に帰ったが、ここも家内のさともろとも全焼していた。ピアノ線が飴のように横たわって、霧雨がしとしと降っていた。私は世田谷の烏山の借家に移り、そこから同じく世田谷の桜上水に疎開していた主計局に通いながら、終戦を迎えた。

昭和二十年八月十五日の終戦の日には、多くの日本人が陛下の玉音放送を聞いて涙を流したが、「私にはどうしたものが、これという感動はなかった。むしろ、遂に来るべきものが来たという安堵感に浸っていた」。

終戦とともに鈴木内閣は総辞職し、八月十七日に東久邇宮稔彦内閣が成立した。津島はこの東久邇内閣に再び蔵相として入閣し、大平もまた再び、後輩の宮沢喜一とともにその秘書官となった。

この皇族内閣の使命は、大きく言って三つあった。その第一は、敗戦のショックによって社会が取り返しのつかない混乱に陥ることがないようにするため、天皇の『終戦の聖断』を仰ぎ、これを軍ならびに一般国民に納得させることである。むろん、若干の暴発はあったが、皇族、軍首脳部の協力を得てこれに成功した。第二は、日本の国がはじめてむかえる占領軍を無用の摩擦や抵抗なく受け入れるため、これに必要な諸措置を行うことである。降伏文書への調印をはじめ、ほぼその軌道を敷くことができた。第三は、降伏条件であるポツダム宣言の実行であったが、日本社会をどう改革すべきかについて、占領軍当局との考え方のずれはあまりにも大きく、前途は多難を予想させた。十月四日、占領軍当局が「政治的、民事的、宗教的自由に対する制限撤廃の覚書」をつきつけ、政治犯の釈放、思想警察の全廃等を要求するに及んで、東久邇内閣はこれを実施できずとして総辞職した。わずか五十一日間の短命内閣である。

津島蔵相が就任にあたって最も心配したのは、敗戦によって財界、金融界が取りかえしのつかないような混乱に陥りはしないかということであった。もっと具体的に、言うと、預金取付けなどがおこって銀行の休業閉鎖等に発展し、経済取引が麻痺するといった重大事態に陥りはしないかという懸念である。これを防ぐのが東久邇内閣の蔵相としての第一の使命であった。そこで津島は、関東大震災の際、銀行の預金支払制限、債務の支払猶予（モラトリアム）などの非常措置を講じたり、昭和二年の金融恐慌時に取付け騒ぎで銀行が休業し、財界が混乱したという苦い体験を持っていたので、なんとしてもそういう事態を招いてはならないと考え、就任第一日目に「どんなことがあってもモラトリアムは行わない」と声明した。

次に津島蔵相が気にしていたのは、進駐軍の軍票使用問題である。もし米軍が日本で軍票を使い始めれば、敗戦により下落化した日本通貨はその信用がガタ落ちとなり、また二種類の通貨の流通によって、敗戦後の経済は混乱の極に達してしまうであろう、という点である。そのうちに、アメリカのラジオ放送で占領軍が軍票を使用しそうな気配が明らかになり、政府は重光外相を通じて、まだマニラにいたマッカーサー元帥に日銀券の使用を要請したが回答はなかった。

津島自身の記述によると、この時の状況は次のとおりである。

「……進駐軍の先遣隊は八月二十八日に、また、マッカーサー総司令官以下は三十日に、厚木へ進駐することになった。そこで、私は、渋谷日銀総裁と相談し、差当日銀券十億円を限度として日銀の仮勘定で払い出してもらい、これを進駐軍に渡して、進駐軍の使用に供しようという非常措置を講ずることにしたのである。そしてまず、この現金の一部を厚木飛行場へ（その他横須賀、鹿児島鹿屋へも）、トラックで運び、これを米軍側へ手渡す手配をした」。

政府は厚木に、有末精三中将を長とする厚木連絡委員会をつくって占領軍をむかえる用意をしていたが、米軍の占領の第一目標は横須賀軍港であり、部隊は厚木にとどまることなく、横須賀に近い横浜へむかった。したがって、津島蔵相の用意した日銀券は、これを米軍に渡す機会がなかった。

日本全土に米軍がはじめて足を踏み入れたこの二十八日は、大平個人にとっては深い悲しみの日であった。病床にあった母サクが郷里で他界したのである。享年七十二。だが、終戦処理に寧日なく働いていた大蔵大臣の秘書官という立場は彼に郷里に帰ることを許さず、岳父の鈴木三樹之助がかわって葬儀に出むいた。

軍票問題は横浜の総司令部との交渉事となり、久保外資局長は自ら横浜へ出張して、軍票使用阻止の工作をはじめた。

太平は、この秘書官時代に『東久邇宮内閣大蔵大臣日誌』と題する日記を記しているが、その中の降伏文書調印の日の記述は次のとおりである。

「九月二日（日）」

七時 首相官邸

本日横浜沖ミズリー号上ニテ重光全権、梅津全権ト聯合國側トノ間ニ停戦協定調印サル。

午前五時全権一行ヲ送りタル早朝ノ官邸、肅トシテ声ナシ。

ところが、この日の夕方、総司令部から翌三日付で発表予定の布告案文が日本政府に手渡された。それは三号から成っており、第一号は軍政を行う旨のもの、第二号は治安維持、命令違反に対する処罰に関するもの、第三号は軍票の使用を行う旨のものであった。これを知って驚いた重光外相は、翌三日、横浜の総司令部にマッカーサーを訪ね、軍政反対の意見を述べてその中止を要請した。マッカーサーは外相の主張を容れ、軍政施行は中止された。

重光外相のマッカーサーへの直訴によって、軍政への移行、軍票使用は一応阻止されたものの、総司令部は軍票については、形式上、いつでも発行するという方針を貫いていた。しかし、折衝の結果、占領軍が日銀券を使用してもよいということになり、九月七日には、「占領軍が日本に駐留するため必要とする資金」として一億円が提供された。これによって、軍票使用阻止工作は事実上成功し、日本は占領による通貨の混乱を免れたのである。

ついで、占領軍は大蔵省庁舎の接收を申し入れてきた。

「九月十日、曇、間々霖雨アリ……七時二十分、終戦中央事務局成田第一部長来訪、連合国総司令部ニ於テ『大蔵省庁舎ヲ明渡スベシ』トノ要求ヲ膺ス、一同愕然タリ、種々打合ノ上、善処スルコトトセリ……」。

だが、結局、翌十一日には、十五日正午までに大蔵省庁舎を占領軍に引き渡すことが正式に決定され、津

島蔵相は狸穴の満鉄總裁の官舎にうつり、各部署は、日本勸業銀行、内務省、東拓ビル、東京証券取引所、四谷小学校などへ分散した。全部局が電が関の古巣へ戻ったのは、十年後の昭和三十一年三月のことである。

「九月十四日（金）曇、十時、閣議、一時、登庁、電ケ関最後、局長会議開催、引渡直前、大臣室頗ル閑散。庁舎引渡シ準備二各局大蒐。車馬輻輳……」。

九月二十三日に、津島蔵相はマッカーサー元帥を訪問した。大平の書いたものから、この時の模様を要約すると、次のようである。

津島蔵相は、かねて終戦連絡中央事務局を通じてマッカーサー元帥に会見の申入れをしていたが、間もなく、総司令部から九月二十三日に会うという返事がきた。これを大平秘書官が津島蔵相に伝えると、蔵相は、「それはおかしい、たしかにおかしい」と独り言を言った。

「どうしておかしいのですか」。

「その日は、秋季皇豊祭で日本の大切な祭日である。日曜、祭日に、仕事の件で面会のアポイントメントをとることは、失礼千万である。敗戦国とはいえ、私は、天皇から親任された国務大臣である。したがって、この措置は日本国に対する非礼であると私は思う。このアポイントメントは断ることにしよう」。

大平は驚いた。マッカーサーと言えば、当時は天皇の上に位置する人である。折角のアポイントメントを日本の蔵相が断つたら、どんなことが起こるかかわからない。

大平は津島蔵相を説得した。

「ご説はごもっともであります。日米間にはまだ講和が成り立っておりません。いわば戦争状態であり。す。いわば野戦の幕営で会いましょうと言うのですから。この際は、そのエチケットを守らなくとも、とがめる筋合ではないと思われ。お受けされるのが至当ではないでしょうか」。

津島蔵相は不承不承、大平秘書官の進言を容れて、宮中における秋季皇豊祭の祭儀を終えたあと、午前十

一時に第一相互ビル七階のマッカーサー司令官の部屋を訪れた。すると、待ちかまえていたパンカー副官は、「実は元帥はきのこの午前十一時に貴大臣の来訪をお待ちになっておりましたが、お見えにならないので残念でした。いま幕僚会議中ですが、すぐお目にかかっていただきます」と言う。

津島蔵相の顔は見る見るうちに明るくなり、連絡の不備による非礼を詫び、元帥の部屋に導き入れられ、元帥と蔵相の通訳ぬきの小一時間にわたる会談が行われた。話題の中心は、当時困窮の極にあった食糧問題の打開策に関するものであったとされている。

九月三十日、津島大臣は日曜にもかかわらず登庁し、朝から会議が二つ行われた。四時、一旦帰邸しているが、「六時再び官邸二登庁、植民地、外国等ノ銀行・開発会社及特別戦時機関ノ閉鎖命令ニ対スル協議ノ続行、十月一日翌朝五時二及フ、五時二十分帰邸」とある。

この日の模様がどうだったか、大平の文章を見てみよう。

「マッカーサー司令官は、日本政府に覚書を交付して、朝鮮銀行と台湾銀行との閉鎖を命令してきた。この覚書を受取った大蔵省は異常な衝撃を受けて当惑した。早速省議を開いて善後策を協議した。その席上大臣は、当時の金融局長に対して、極めて不機嫌にかつ語気荒く次の様にいわれた。

「一体君はこの覚書を、はい、かしこまりました、と受取ってきたのか。君も承知している通り銀行には数多くの預金者がある。その預金者の中には寡婦もおれば孤児もいる。その人達は預金の引出しを禁止されて、明日からの暮しをどう立てたらよいかというので今頃は碌々眠れないことだろうと思う。もし私が君であれば、その覚書を交付された時、直ちに司令部の係官に対して、この預金の始末を何時までにどうつけるかを念を押してからでないかと、これを受取るわけにはまいらぬと云って頑張るよ。少しは奇辺のない預金者のことを考えたらどうだね」と。

この言葉には誰からも一言半句の弁解も抗議もなかった。そこでその夜はその善後対策のため省議が徹宵続けられた。夜が深々と更けわたる二時頃であつたらうか、局長一同には疲労の色が歴然と見えかけた。あまりかねた私が傍から大臣に向つて、「大臣、この作業は明朝更に続けることにして、今晚はこの辺で打切られては如何かと思ひます。次官や局長の中には大臣のように健康に恵まれていない方も居られるし、また家庭においても多数の子供さんを抱えている人も多い（津島さんには子供がいない）のであるから、差出がましいがこの辺で省議を中断して明朝再開ということにしていただきたいと思ひます」と進言した。

ところが大臣の顔はみるみる紅潮をおびてきて、「この国家非常の時に、そのような心懸けでどうするのだ。さつきから見ていると隣の席の者と時計を見合せたりしている不心得者がいる。そんなに細君が恋しいかね。もし腹がすいたというのならこの津島が握り飯ぐらい食わせてやる。大体君（小生を指す）もそんなに細君の顔がみたいのかい」と逆襲される始末で手のつけ様がない。そこで漸く山際（正道）次官と愛知（揆一）文書課長の二人が明朝八時までに対策の一切を二人でねつた上、大臣のお屋敷に参上するということだけでけりがつき、省議は朝三時頃散会となつた。

翌朝山際次官と愛知文書課長は約束の八時にちゃんと長文の司令部に対する嘆願書（英文）と善後措置要綱を携えられて碑文谷の石川邸（津島の寄寓先）の門を叩かれた。それから本件の交渉が軌道に乗つたのである。

大平は、この夜のことについて、「大体役人というのはおしなべて事勿れ主義であり、一つの目的を追い求めて飽くことを知らないなどという熱情には乏しいものである。国民の利害休戚ということに鈍感になりがちなものである。役所仕事自体にそういう性質がまわっているものである。その積弊を津島蔵相はこういうやり口で矯められたのである。疲労と睡気で床急ぎをしていた私は、横面を大きくたたかれたような緊張味を感じた」と書いている。



十月五日、東久邇内閣は総辞職し、幣原喜重郎内閣に政権をゆずった。

すでに記したように、大平は、戦争末期に空襲で家を焼かれ、世田谷区烏山の仮住いで終戦をむかえたが、終戦後比較的早く、疎開していた家族と一緒に住まうことができた。九月下旬、岳父の鈴木三樹之助が駒込林町に家を手に入れ、そこへ同居することになったからである。

この家のもともとの持主は、荻生徂徠の末裔、大給子爵であり、敷地は千二百坪、庭には、樹齢五百年に及ぶ銀杏の樹があった。床の間や畳廊下がついた十五畳、十二畳などの大きな部屋がある大名屋敷だった。

焼野原の東京には、疎開地や外地から引き揚げてきても、住むところがなかった。したがって、この大きな家には、鈴木家や大平家の関係者が何組も同居することとなる。最も多いときには、鈴木三樹之助夫妻、大平一家、その他七世帯が在住した。そのなかには伊東正義一家もいた。伊東は以後二年間、ここに起居し、その後生涯にわたる大平の友人となった。

なお、二十一年九月九日、三男の明が出生したのもこの家においてである。